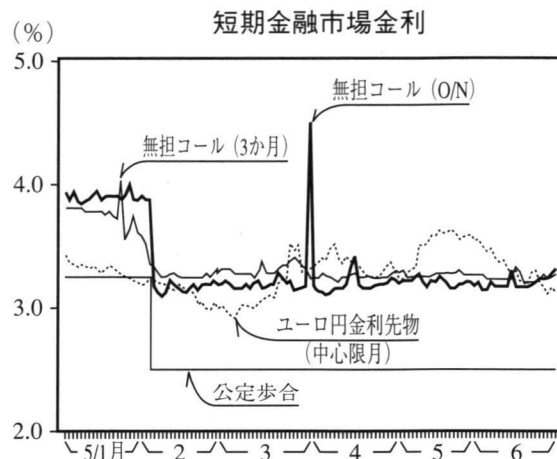


## 金 融 市 場 動 向 （平成 5 年 6 月）

### 1. 短期金融市場

6 月中のオーバーナイト・レート（無担コール）、ターム物レートは、それぞれ横ばい圏内で推移した。また、ユーロ円金利先物（金利ベース）は、月中を通じて緩やかに低下した。

コール・プロパー手形市場資金平均残高は 44 兆 7,332 億円と、前月（45 兆 2,212 億円）を若干下回った。



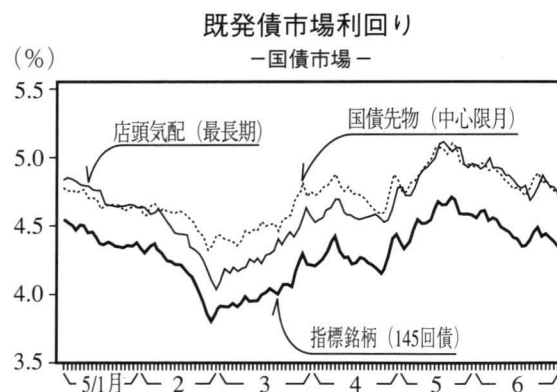
### 2. 資本市場

6 月の国債利回り（145 回債）は、月央以降、円高の進行や米国長期金利の低下等を背景に低下し、4.340%（前月末 4.575%）で越月した（国債先物中心限月 4.726% < 前月末 4.944% >）。

国債の出来高をみると、現物（店頭取引）、先物ともに前月を上回った。

株式市況（日経平均株価）は、3 日には 21,076 円と年初来高値を更新したものの、その後は衆議院解散や円高の進行等を嫌気して下落し、結局 19,590 円（前月末比 △962 円）で越月した。この間、株式出来高（東証第 1 部月中 1 営業日平均）も、3.49 億株と前月（5.01 億株）を下回った。

起債動向をみると、長期国債（7 月債、10 年 < 価格競争入札分 >）は、落ち着いた入札となった（6 月 23 日入札分：募入平均利回り 4.729%、応募倍率 3.69 倍）。短期国債についても、総じて落ち着いた入札となった（6 月 4 日入札分 < 6 か月もの >：募入平均利回り 3.179%、応募倍率

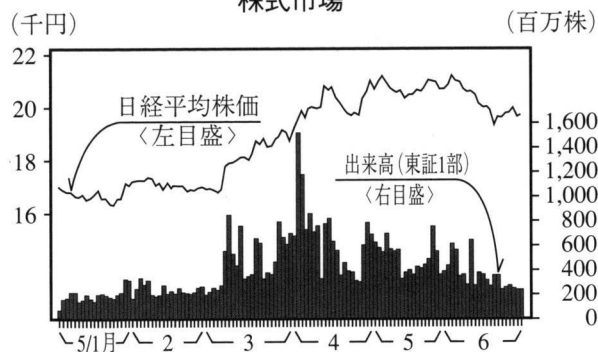


2.18倍、6月16日入札分<3か月もの>：募入平均利回り3.115%、応募倍率1.58倍)。なお、超長期国債についても入札が行われ、総じて順調な入札結果となった(6月10日入札分：募入平均利回り5.531%、応募倍率2.71倍)。

国内公募普通社債の発行は、月央以降の債券市況の持ち直しを受け、既往最高の5年3月(5,760億円)並みの水準となった(5月1,950億円→6月5,400億円)。

国内エクイティ市場での発行(6月払込み分、増資は除く)は、前月を上回った(5月370億円→6月2,000億円)。

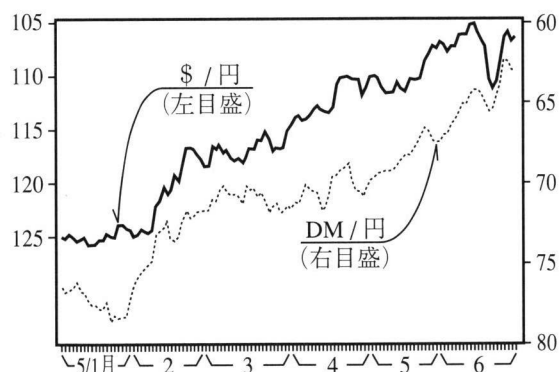
株式市場



### 3. 外国為替市場

6月の円相場(対米ドル直物相場、終値)は、月央にかけて、わが国の大幅な経常黒字等を背景に引き続き上昇し、15日には105.03円と既往ピークを更新した。その後下旬には、わが国の衆議院解散等を背景に一時111円台まで下落する場面もみられたが、月末にかけて再び円高に転じて106.51円で越月した(前月末107.45円)。一方、円対マルク相場

外国為替市場

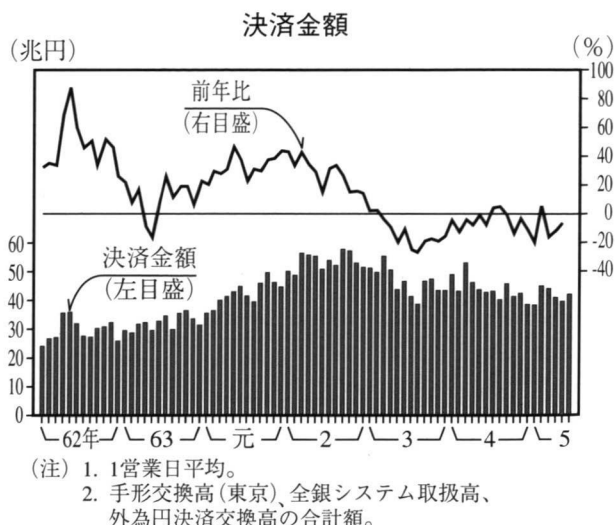


場(ニューヨーク市場、終値)は、独金利引き下げ期待等を背景に上昇し、25日に62.35円と既往最高値を更新した後、62.70円で越月した(前月末67.51円)。

なお、東京外国為替市場の出来高(円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均)は186.5億ドルと、前月(150.9億ドル)を上回った。

#### 4. 決 済

6月の資金決済の金額（1営業日平均）をみると、全銀システム取扱高、外為円決済交換高、日本銀行当座預金受払額は前年同月を上回った（全銀システム：前年比+4.4%、外為円決済：同+3.6%、日本銀行当座預金受払：同+15.4%）が、手形交換高（東京）は前年同月を下回った（手形交換：前年比△5.0%）。また、国債の決済金額（1営業日平均）は、移転登録、振込口座振替ともに前年同月を上回った（移転登録：前年比+29.8%、振込口座振替：同+55.0%）。



#### 5. 資金需給、金融調節

6月の資金需給をみると、銀行券要因が1兆9,449億円の不足（前年同月2兆1,492億円の不足）となった一方、財政等要因は、交付金や国債利払い等の支払いがかさんだことから、2兆2,984億円の余剰（前年同月1兆2,308億円の余剰）となり、全体では3,535億円の余剰（前年同月9,184億円の不足）となった。

こうした状況下、日本銀行は買入手形の期日落ちを進めることなどにより資金を吸収した。

7月の資金需給（国債発行織り込み前）をうかがうと、銀行券要因については、ボーナス資金の還流が見込まれることから、9,000億円程度の余剰（前年同月9,400億円の余剰）となるのに加え、財政等要因は、夏季賞与等にかかる源泉所得税を中心とする税揚げが見込まれるものの、国債元利払い等がかさむことから、1兆4,400億円程度の余剰（前年同月3兆1,048億円の余剰）となる見通し。この結果、全体では2兆3,400億円程度の資金余剰（前年同月4兆448億円の余剰）と予想される。

#### 6. マネーサプライ、銀行券、預金・貸出

5月のマネーサプライ統計をみると、M<sub>2</sub>+C D平残前年比伸び率は+1.5%と前月に比べ1.0%ポイント上昇した。これは、主として財政要因（税揚げの減少等）がマネー押し上げに働いたことによるもの。通貨種類別にみると、預金通貨、準通貨の伸び率が上昇した。また、広義流動性

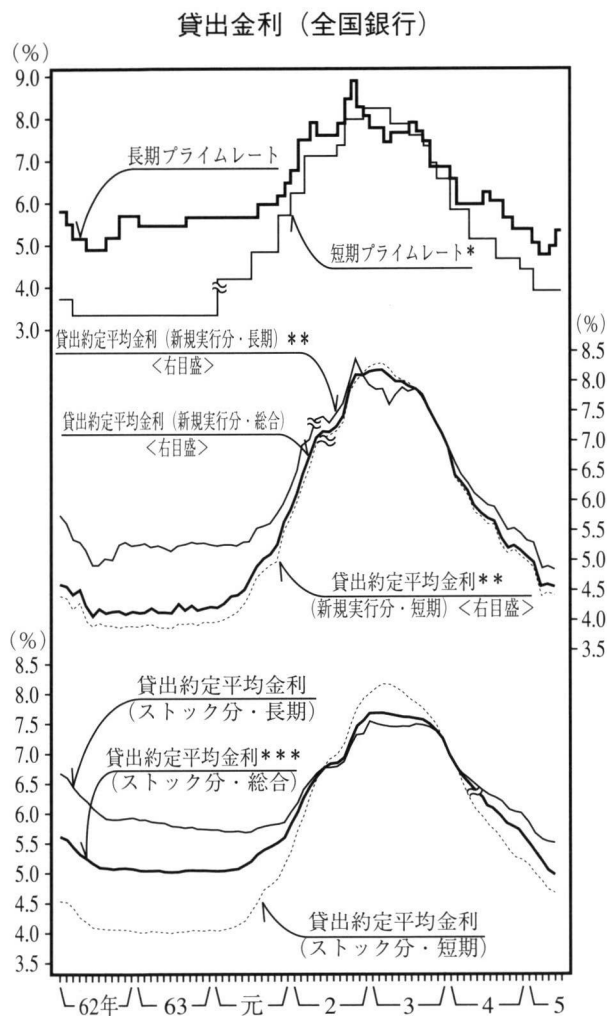
の平残前年比伸び率は+3.0%と前月に比べ0.3%ポイント上昇した。

6月の銀行券平残前年比は+3.9%と前月を下回った。

6月中の金融機関の預金・貸出動向をみると、預金平残（実質預金+C D、都銀、地銀、地銀II）は、前年比+1.0%と2か月連続で前年比プラスとなった。また、貸出平残（都銀、長信、信託、地銀、地銀II）は、前年比+1.0%と再び伸び率を低め、既往ボトムを更新した。

## 7. 貸出・預金金利

5月中の貸出約定平均金利（全国銀行）をみると、新規実行分については、短期が前月比小幅低下した（前月比 $\Delta 0.046\%$ ）ほか、長期も、長期プライムレートが引き上げられた（5月6日、4.9%→5.1%）ものの、前月比小幅低下し（前月比 $\Delta 0.051\%$ ）、総合でも小幅の低下となった（4月4.541%→5月4.488%）。また、ストック分についても、短期、長期、当座貸越ともに前月比小幅低下し（短期：前月比 $\Delta 0.047\%$ 、長期：同 $\Delta 0.025\%$ 、当座貸越：同 $\Delta 0.025\%$ ）、長期は既往最低水準に達した。この結果、総合（当座貸越を含む）は小幅低下した（総合：4月5.117%→5月5.089%）。この間、5月の自由金利定期預金金利（3か月以上6か月未満の都銀平均受入金利）は、前月比上昇した（4月2.936%→5月2.978%）。



(注)\* 元年1月以降は都市銀行のなかで最も多くの数の銀行が採用した金利。

\*\* 2年4月以降は地方銀行IIを含む。

\*\*\* 4年4月以降は当座貸越を含む。

(平成5年7月13日、調査統計局)